

7枚のカードと3枚のカードと1枚のカード

トシヒコが足を折って入院してから、幾日が過ぎた頃、オジさんがお見舞いにやってきた。

「やあ、トシヒコ君。足以外は、元気なようだね」

「うん。オジさんこそ、元気だね」

トシヒコのオジさんは、トシヒコのお母さんの妹(トシヒコの叔母さん)のダンナさんにあたる。そのオジさんが言うほど、トシヒコは元気が無かった。

「これじゃあ、ボク、サッカー選手になれないよ」

トシヒコはため息をつきそうな様子でしゃべった。

「大丈夫さ。その怪我は、サッカーの練習に行こうとして、出来たのだから？」

「うん。遅刻しそうになって、慌てて階段を下りたら、転んで骨が折れちゃったんだ」

「そうさ、サッカー選手は誰だって、サッカーで怪我をしても乗り越えてきた人たちばかりだから、トシヒコ君も怪我が治れば、サッカーができるようになって、がんばればいいのさ」

オジさんに励まれても、トシヒコは気落ちしたままだった。

「僕が君くらいの頃、なりたいものが7つもあってね。そのひとつがお医者さんになることだった。もし、僕がお医者さんになっていれば、君を治してあげられたのに」

そういうオジさんは、今では数学者で、大学の助教授である。

トシヒコとオジさんは、それから気晴らしにUNOをはじめた。いつも、親戚が集まると決まって、UNOをするので、トシヒコもルールは知っていた。

しかし、UNOを二人だけでするのは、少々飽きてきた。

「そうだ。UNOのカードを使って、違う遊びをしよう」

オジさんは、UNOのカードの中から、「1」から「9」と「0」のカード、合わせて10枚を取り出し、切りはじめた。

トシヒコも同じように、10枚のカードを切りはじめた。

「それじゃあ、トシヒコ君。日本代表のカラーの、青い数字のこのカードを7枚めくって、持っていて」

トシヒコはオジさんに渡された10枚のカードを上から、7枚引き抜いた。オジさんもトシヒコから渡されたグリーンの数字の10枚のカードから、7枚を引き抜いた。

「それでは、トシヒコ君。この3枚カードを僕が、足したり引いたりするから、その和を予想してごらん」

と、言って「5」と「4」と「6」のカードをオジさんは出した。

「5と4を足して9、そこから6を引いて、3になるんじゃないかな」

「じゃあ、3のカードを出してごらん」

トシヒコは手持ちのカードを眺めた。

「あっ、3のカードが無い」

「そうすると、違う計算をして、違う解の答えの数字を出さなくてはいけないね。今度はせいで、一緒にカードを出そう。僕も、計算の解と同じ数字のカードを出すから」

トシヒコはオジさんの計算の答えを予想した。5から4を引いて1、そこから6を足した7が答えになるのと考えた。そして、「7」のカードを自分は持っている。

「オジさん。決まったよ。せいの……」

「ちょっと待ってね」

オジさんは、出した3枚のカードを、手持ちのカードの中に戻した。

「それじゃあ、いくよ。せいの、7！」

「7！ 同じカードだ」

二人は同じ数字の、7のカードを出した。

「5引く4に、足す6で、解は7。ご名答！」

「エヘヘ」

トシヒコはオジさんの計算の答えを予想できたことに、得意になった。

「今度は、トシヒコ君。君が3枚のカードを出して、ごらん。それを足したり引いたりした、解を僕が持っているこのカードの中から、当ててあげよう」

オジさんに、言われるがまま、トシヒコは「1」と「9」と「8」のカードを出した。

「1と9と8だね。わかった。その三枚のカードをしまつて、また、せいで、君は計算の解のカードを出して、僕は予想した解のカードを出そう」

トシヒコはすぐに、3枚のカードをしまった。答えのカードをすぐに出したくて仕方ないのだ。

「それじゃあ、いくよ。せいの、0！」

「せいの、2！」

オジさんはグリーン「0」のカード、トシヒコはブルー「2」のカードを出した。

「オジさん、ここはどう考えても、1足す9で、8を引いて、答えが2になると誰でも思うよ」

「それが、2のカードが手持ちに無かったのさ」

そういふと、オジさんは、7枚のカードを残りの3枚のカードと混ぜて、10枚にした。

「よし、もう一度カードを切りなおして、今度は3回勝負をしよう。もうだいたいのルールは覚えたね？」

「うん。これ、5回勝負ならPK戦だね」

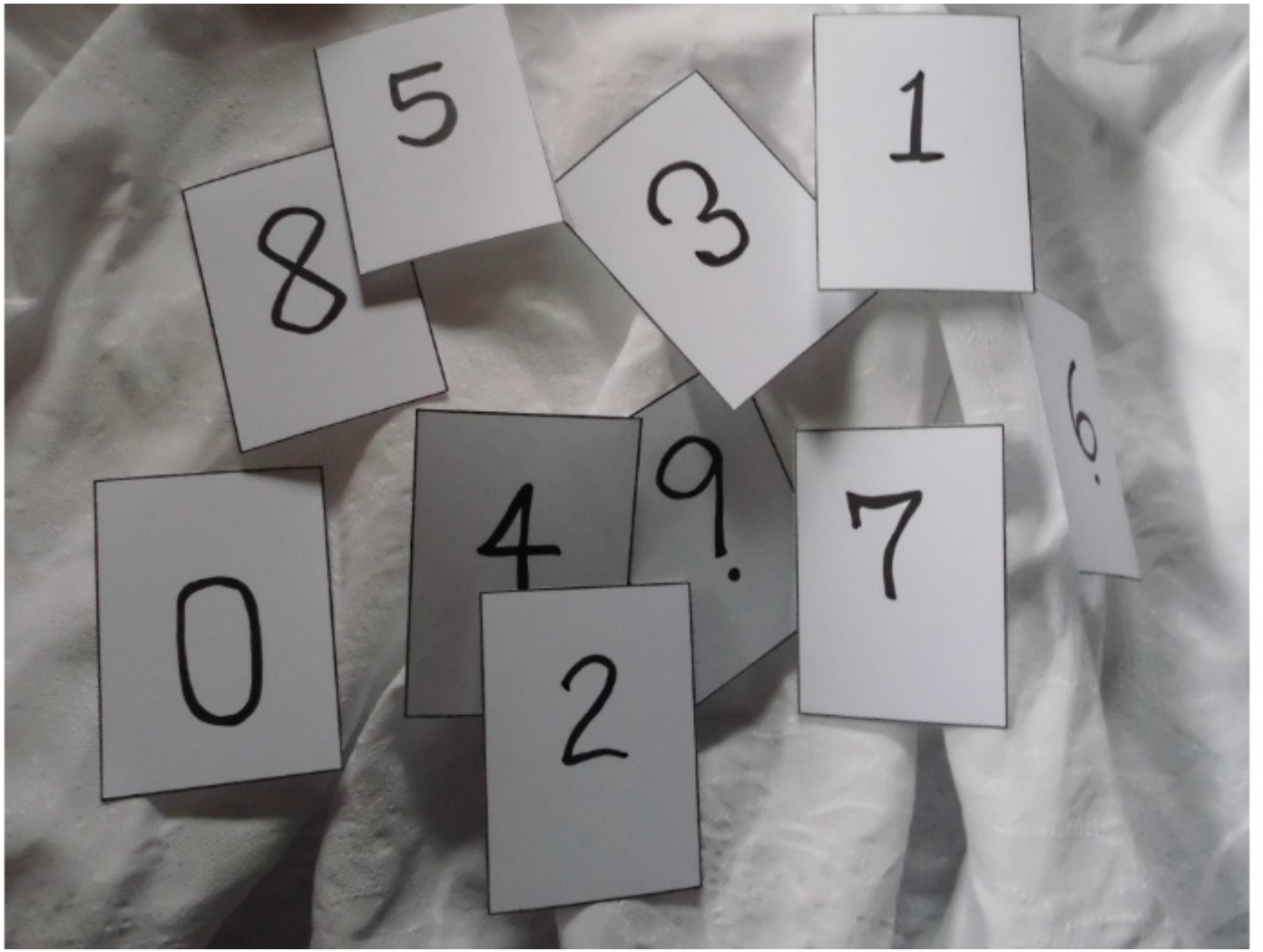
「そうだね、先攻と後攻があるから、PK戦になるね。それから、計算間違いはペナルティで負けにしよう。サッカーで、ペナルティキックでシュートをゴールポストから外すようなモノだからね」

「ねえ、ペナルティキックをするのは、3枚のカードを出すほうなの？ それとも、計算の答えを当てるほう？」

「ペナルティキックをするほうは、きっと3枚のカードを出すほうだね。基本的にゴールポストの中の左側と右側と真ん中を、ペナルティキックをする人は狙うから。それに、ゴールキーパーは当てずっぽうでも、ボールに触れてゴールを阻むことができるからね」

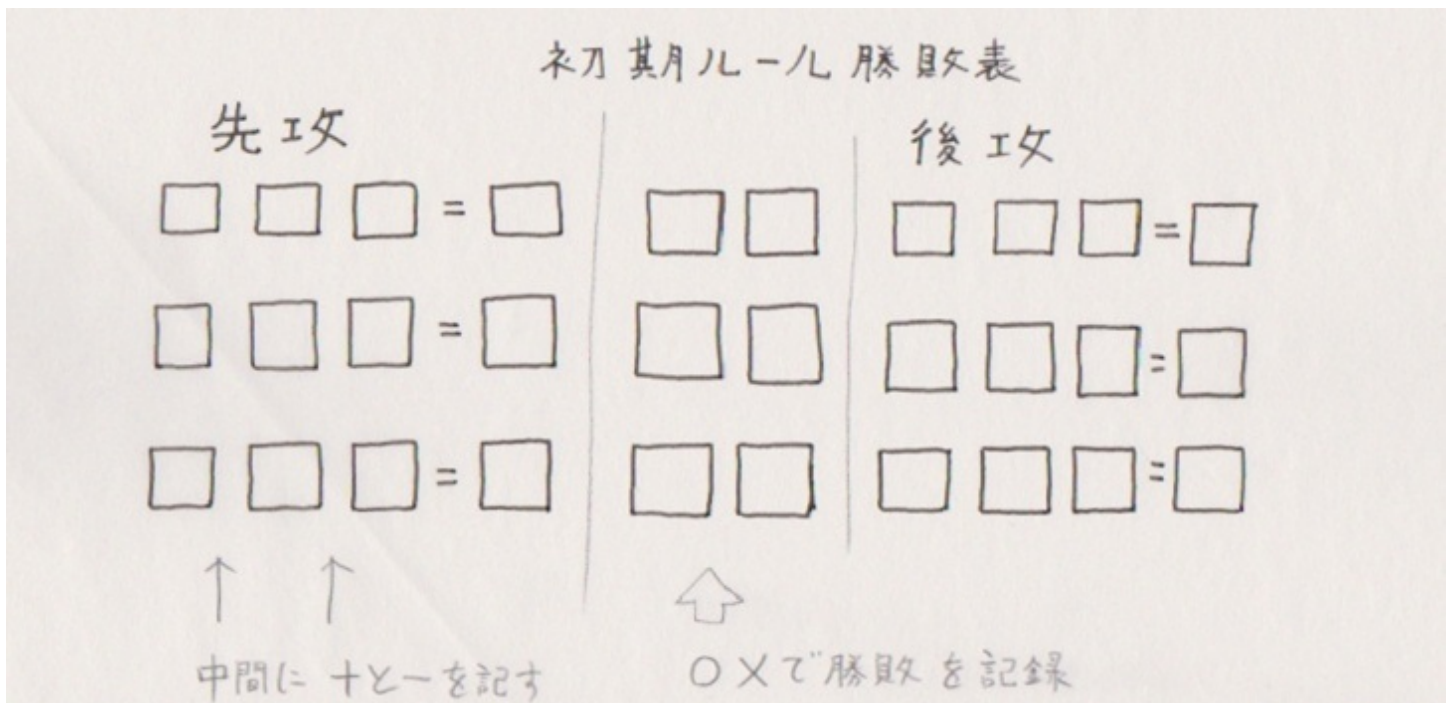
「わかった。3枚のカードを出すほうが、ペナルティキックをする人なんだね」

「それじゃあ、3回勝負の1ゲームをしようじゃないか」



— 731 『ななつとみつとひとつ』 初期ルール —

- ・ 「1」から「9」と「0」の10枚カードを、二人分2組用意する。
- ・ プレイヤー二人は、自分の10枚のカードを互いに渡し、カードを切って返す。
- ・ 10枚のカードから、7枚のカードを引き抜き、手持ちのカードとする。
- ・ 先攻のプレイヤーは3枚のカードを表に出す。
- ・ 出した3枚の数字を加減(+-)した和(=)の数字を、守る側は予想する。
- ・ 出すカードが決まったら、先攻のプレイヤーは3枚のカードを手持ちに戻して、攻守のプレイヤーともに、同時にカードを出す。
- ・ 攻める側の数字と守る側の数字が合わなければ、攻める側の勝ち。攻める側の数字と守る側の数字が合えば、守る側の勝ち。
- ・ 攻める側のプレイヤーが、正しい計算の解を出さなければ、ペナルティとして、攻める側の数字と守る側の数字が合わなくとも、守る側の勝ち。
- ・ 先攻の勝敗がつけば、次に後攻のプレイヤーが3枚のカードを出す。
- ・ 以後、3枚の数字の計算の和を予想し、同時にカードを出して、勝敗を決める。
- ・ 先攻と後攻の勝敗で1勝負とする。
- ・ 3回勝負で、ゲームの勝敗を決する。



魔法の数字とバランスの数字と選択の数字

トシヒコとオジさんは、カードを使ったこのゲームを何度かプレイした。

すると、トシヒコは「どうして」と思うことが出てきた。

「オジさん、どうして10枚のカードの中から、7枚取るの？」

「7は魔法の数字なのさ。7つの海に、7福神。7つ道具に、春の7草、秋の7草。そして、誰でも7つまでなら、そのモノを覚えていられる。だから、3回勝負をする内に、相手が持っているカードをだんだんとわかってくる」

「どうして、3枚のカードを出して計算するの？」

「3はバランスの数字なのさ。二枚だけだと、簡単に相手が計算した解のカードを当てられるね。でも、4枚もカードを出されたら、ややこし過ぎて、計算の答えが予想できないだろう。3枚だと調度バランスが取れる」

数学者のオジさんの言うことなので、トシヒコはなんとなく、納得したる

「最後に一枚だけ出して、予想を当てるのは、どうして？ 二枚でもいいと思うけど」

「そうだね。でも、たったひとつの数字を選んでカードを出すのは、とてもスリリングじゃないか。解を当てたときは、とてもうれしいだろう。それに、1は選択の数字なのさ。誰でも、多くのものから、たったひとつを選び出す」

トシヒコはオジさんの話を不思議がった。

「うん、いい考えがある。トシヒコ君、君が好きなアイスクリームをひとつだけ、選んでごらん」

「えっ！ じゃあ、ストロベリー」

オジさんは、イスから立ち上がった。

「今、いろいろなアイスクリームの中から、ひとつ選んだね。それが選択の数字さ。僕はチョコミントを選ぶことにしよう」

そして、オジさんは、トシヒコのお母さんに内緒で、アイスクリームをトシヒコにごちそうした。



正の数と負の数と正でも負でもない数

オジさんがまたお見舞いに来て、トシヒコとまた、あのゲームをはじめた。

「オジさん、2から5を引いてもいい？」

「ああ、マイナスの数だね。いいよ」

「じゃあ、マイナスの答えを出してもいいの？」

オジさんは、少しだけ黙って考えた。

「それは、まずは止しておこう。計算の途中までなら、マイナスの数になってもいいことにしよう」

「オジさん、ちゃんと考えて決めたの？」

オジさんはにっこりと笑った。

「ちゃんと考えたよ。負の数は計算の解に出してはいけないことにしよう。負の数のカードが無いからね」

「負の数？」

「まだ、トシヒコ君は、そこまで習ってないね。数はいろいろあって、小数点の数や、分数がある。そして、マイナスの数である負の数と、整数である正の数がある」

「ふうん。じゃあ、解は正の数を出さないといけないんだね！」

オジさんは、トシヒコの考えを制するように、手持ちのカードから、「0」を出した。

「そうすると、この0を、計算の解に出すことはできない」

「ええ？ どうして？」

「0は正の数でも負の数でもない数なのさ」

トシヒコはグリーンの「0」を見つめた。

それから、何日か経って、またオジさんはトシヒコのお見舞いに来て、あのゲームをした。

「なんだか、飽きてきたよ。足し算と引き算ばかりだもん」

オジさんは、その言葉を待っていたかのように、すかさず言った。

「トシヒコ君は、小学校の三年生だから、掛け算と割り算ができるね？」

トシヒコは恐る恐る答えた。

「うん、九九なら、だいたい言えるよ」

しかし、やや自信はなかった。

「それなら、3枚の数字を足したり引いたり、掛けたり割ったりしよう」

トシヒコにはこうなると、予想がついていた。数字ではなく、「足したり引いたり、掛けたり割ったり」というカードがあるなら、それを出していただろう。

「これなら、0のカードを3枚のカードの内に出しても、予想が読まれにくくなるね」

3枚のカードの中に、「0」が混じっていると、二つの数を引き算か足し算のどちらかにするしかない。すると、半分の確立で計算の解を当てることができた。

「これは。覚えていたほうがいいが、どんな数も、0で掛けると、0になる。でも、けて0

で数を割ってはいけないよ」

「どうして？ オジさん、どうして？」

「正でもない、負でもない、この数で数を割ることはできない。これは数の秘密のひとつなのさ」

トシヒコは、とても不思議な気持ちになった。はじめて、数に秘密があることを知ったことが、こんなにも、不思議だなんて、今まで気づかなかったからだった。

円周率「3.14…」とカードの役

トシヒコとオジさんは、また、あのゲームをする。

「なんだか、ぐっと難しくなったよ」

「計算間違いが多くなったぞ、トシヒコ君」

「……オジさん、ちょっと手加減してよ」

「それじゃ、いくよ、せいの、4！」

「せいの、9！」

巧みに掛け算と割り算を使いこなすオジさんに、トシヒコは負けとおしだ。

「あー、また負けた。」

「4足す8の和は12、それを3で割ると4さ」

3回勝負で、先攻のトシヒコは3回とも負け、後攻のオジさんは3回とも勝った。

ふと、オジさんは首を傾げた。

「トシヒコ君、僕は3と1と4の数を、計算の解に出さなかったかな」

「やだなあ、オジさん。今したばかりの勝負の数をおぼえていないの？」

「3.14、円周率…」

オジさんは自分の手持ちのカードを「3」「1」「4」と、並べた。

「トシヒコ君は、長方形の表面積の求め方を知っているね」

「うん、たしか、辺の長さを掛けるって、習ったよ」

「三角形の求め方は、底辺掛ける高さ割る2。そして、円の表面積の求め方に必要なのが、この円周率なのさ」

トシヒコには、その「314」の数字が、何かあるようには思えなかった。

「よし。これからは、ポーカーやセブンブリッジのように、このゲームに役を決めることにしよう」

オジさんが急にそんなことを言うので、トシヒコは驚いた。

「役って、どんな役にするの？」

「そうだね。数学に関わる数字が、ふさわしいと思うな。今度、役にふさわしい数と思われるのを、見繕ってくるよ」

オジさんは、病室にノートパソコンを持って現れた。

「トシヒコ君に、今日は素数について、教えてあげよう」

「ソスウ？ ソスウって何？」

ノートパソコンを起動させて、音楽ソフト(DTMソフト)を立ち上げるオジさん。

音符や記号を入れられる楽譜が映された画面をトシヒコに見せる。

「見てごらん。このスコアのトラック1に、テキストに音符を付けて、こうしてコピーをとって、第100小節まで貼り付けよう」

オジさんが使い慣れたソフトなので、みるみるうちに、100小節までメロディフレーズが貼り付けられていく。

「次にこのトラック2には、第2小節から、そうだね、音符2つ使って、フレーズを作ろう。そして、2の倍数の小節に、フレーズを貼り付ける」

そして、100小節まで、第2小節のメロディフレーズを貼り付けていく。

「また、トラック3には、第3小節から、音符を3つ使ってフレーズを作ろう。同じように、3の倍数の小節にフレーズを貼り付ける」

100小節まで、貼り付けた。

「それじゃあ、まず、10小節までを聞いてみよう」

ソフトが出来立てのスコア通りに、音楽を鳴らす。

「5小節と7小節は、トラック1の音しか鳴らなかったね。5と7、そして2と3も、みんな素数なのさ」

「どういうことなのオジさん？」

「素数とは、1の整数と、自分と同じ数以外では、わりきれない整数のことなのさ。1では、どんな整数もわりきれれるけど、1は特別な数字だからね。2も3、2で2をわりきることができるし、3も3でわりきることができる。自分と同じ数なら、わりきれれるけど、ほかの数では、整数にわりきれない」

「整数で、わらないといけないの？」

「そうだね。小数点の数や分数ではわらない」

そう言うと、トシヒコの前にノートパソコンを置くオジさん。

「今度はトシヒコ君。君が音符をトラック5の第5小節に、5つ打ってごらん」

「いいの？ オジさん！」

「うん。トラック5は、君のプライムミュージック(素数音楽)だ」

トシヒコは音符を5つ打つと、オジさんはまた、5の倍数の小節にコピーを貼り付けていった。さらに、トラック7にも同じように7つの音符のメロディフレーズを7小節に作り、7の倍数の小節に、コピーしていく。

「もう一度、20小節まで聞いてみよう」

すると、11小節・13小節・17小節・19小節で、トラック1の音しか鳴らなかった。

「わかった。11と13と17と19は、素数なんだね、オジさん」

「そうだよ。だから、彼ら素数に、数と同じだけの音符を小節の中に付けてあげよう」

「ねえ、どうして、素数のことを教えてくれるのに、わざわざノートパソコンなんか使うの？

」

「本当は、たくさんのピアノを運び込んで、それぞれの素数を担当する演奏家をここに連れてきたかったけど、それじゃあ、看護婦さんに叱られるからね。小さなノートパソコンなら、持ち運びも便利だし、音量も調節できる。そして、音楽と素数が結びついている気がすることを、教えられるからね。なにしろ僕は音楽家になりたかったからね」

「ねえ、この素数があのカードの役なんだね」

「そうだよ、トシヒコ君。ご名答」

その日は時間が来るまで、ノートパソコンが奏でるプライムミュージックがずっと、鳴り響いていた。

角度の単位の発祥と多角形たちの角度の和

病院の入院患者さんが、屋上で天文観測を特別にする日、オジさんはトシヒコのところにやってきた。

「トシヒコ君、角度について、知っているかい？」

「直角が90度とか、180度が反対の方向だってことは、知っているよ」

「それじゃあ、180度に反対方向になって、もう一回反対方向になって、向きを直すと360度になるね。角度はひとつの円を360分の一にした単位だけど、何からはじまったと思う。」

「ええっ？ そんなのわかるわけないよ！」

急に、算数の問題を文章で出されたように、トシヒコは面食らった。

「それなら、ヒントを言おう。この夜空が答えを教えてくれる」

トシヒコは夜空を見て、角度の単位のはじまりのヒントを探した。でも、夜空には、天の川が輝いていることしか、見つけられなかった。

「わかるかい？ 今日の星空は、明日同じ時刻には、約一度だけ、ズレているのさ」

「そうだ、学校で習った。もうすこし思い出すところだったのに」

「ごめん、ごめん。昔の人は月の暦で、一年が360日だと思っていた。これだと、6年ごとに、閏月を設けなくてはいけないのだけど、その話は置いておいて、角度はこの360日からはじまったとされる。一日おおよそ一度、星空はズレて現れる。一年たてば、また同じ日の同じ時刻に現れる。だから、360度で一回りするのさ」

オジさんもトシヒコと一緒に、天の川を見上げた。

「いやあね、僕は昔、天文学者になりたかったから、毎日夜空を見ていたのだよ。今でも、星座がどの方角にあって、いつの時季に出るか心得ているつもりだよ」

そういうと、おもむろにポケットから三角形の模型をオジさんは取り出した。

「角度に話に戻るけど、この正三角形には、3つの角があるね。その3つの角度を足した和がいくつかわ知っているかい？」

「ええ？ また問題なの？」

「いいや。ただ、聞いてみただけさ。この正三角形は、1つの角が60度。正三角形だから、3つとも同じ60度になる。だから、この三角形の角度の和は、180度になる」

すると、今度は形の違う三角形をポケットから取り出した。

「この二等辺三角形は、角の角度が同じ45度が二つ、直角の90度がひとつで、角度の和は180度になる」

「同じ、180度だね」

「そう。三角形は、どんな形でも、角の角度を3つ足した和は同じ180度になる」

トシヒコに2つの三角形をオジさんは、渡すと、今度は四角形の模型を取り出した。

「この正方形は、角が4つあって、みんな直角だから90度の4倍で、360度。これも正方形の角度の和だけが、360度じゃない。どんな四角形でも、4つの角度を足した和は、360度になる」

オジさんは、トシヒコが持っている二つの三角形と四角形を交換した。

「今、角度が合わせて360度になる、図形同士を交換した。これは公平な交換だね」

トシヒコは、正方形の模型を見つめた。とても、不思議な気持ちになっていた。

「見てごらん、トシヒコ君。この2つの三角形と角度の和と同じように、この広い夜空は360度、一年をかけて回っている。まるで、この三角形の2つに、その四角形の中に、一年の星空の角度が詰まっている気がしないかい？」

「オジさん、これも、あのカードの役なんだね」

「ご名答。他にも、五角形も、六角形も、七角形も、角を足した和は、同じ角度になるのだよ」

オジさんのポケットから、多角形の角度たちが取り出された。

完全数とフィボナッチ数と黄金比

メモ ・ 完全数とフィボナッチ数について

いつものように、お見舞いに来たオジさんが、完全数「28」とフィボナッチ数「2」「4」「8」「16」「32」「64」「128」「256」「512」をカードの役にするとことを、話す。これらについては、資料の洗い出しが不十分なので、後ほど、書き加える。

「たくさん、役ができたね。ちょっと、カードで遊んでみようよ」

「よし、それなら、黄金比も入れよう。1.61803398...161が、役の数字だ」

「それはいいけど、黄金比って何？」

「黄金比は宿題にしておこう。それよりも、1ゲーム3回勝負だけでは味気ないから、今までの1ゲーム3回勝負を1ラウンドにして、1ゲーム3ラウンドにしてみよう」

「大丈夫？ 長すぎたりしないの？」

「そんなことはないさ」

そういうとオジさんは、おみあげのお菓子の包装紙の裏に、なにやらボールペンで書き込みはじめた。

「これは、スコアシートだ」

「わあ、キレイにならんでいるね」

オジさんはスコアシートの説明を始めた。

「この欄に先攻のプレイヤーの名前を書く。下のここは後攻のプレイヤーの名前。この欄に3枚のカードの数字を書き込む。そして、先攻の側が勝ったら、ここに解の数字を書く。後攻はこの欄だね。1ラウンドが終わったら、この欄に勝った分の得点と役の得点を書いて、3ラウンドをしたら、ここに2つ以上の同じ役ができたなら、ボーナスの得点を書く。この角の欄に合計得点を書いて、ここの欄に、勝った人の名前を書く」と

「これ、何かに似てるね？」

「野球のスコアボードさ」

サッカーが好きなトシヒコにとっては、PK戦から9回戦になって、ちょっと複雑だ。

「うん。ついでに、1勝負のことを1イニングにしよう。9イニング、3ラウンド、1ゲーム。野球の攻守と同じになった。こりゃ、いい」

「サッカーのPK戦みたいに、5回勝負でいいんじゃないかな」

「僕は昔、プロ野球選手になりたかった。こればかりは譲れないよ」

「オジさん、大人げないよ」

「ごめん、ごめん。今度、トシヒコ君の足が完治したら、一緒にサッカーをしよう」

トシヒコはその言葉に、感激した。

「オジさん、約束だよ。一緒にサッカーをすること」

「ああ、約束だ」

それから、二人はゲームをして遊んだ。



退院のお祝いのトシヒコのカード

トシヒコは退院し、自宅で療養していると、オジさんがお見舞いにやってきた。

「トシヒコ君、退院おめでとう。君に見せたいものがあるんだ」

オジさんは、10枚のカードを取り出した。

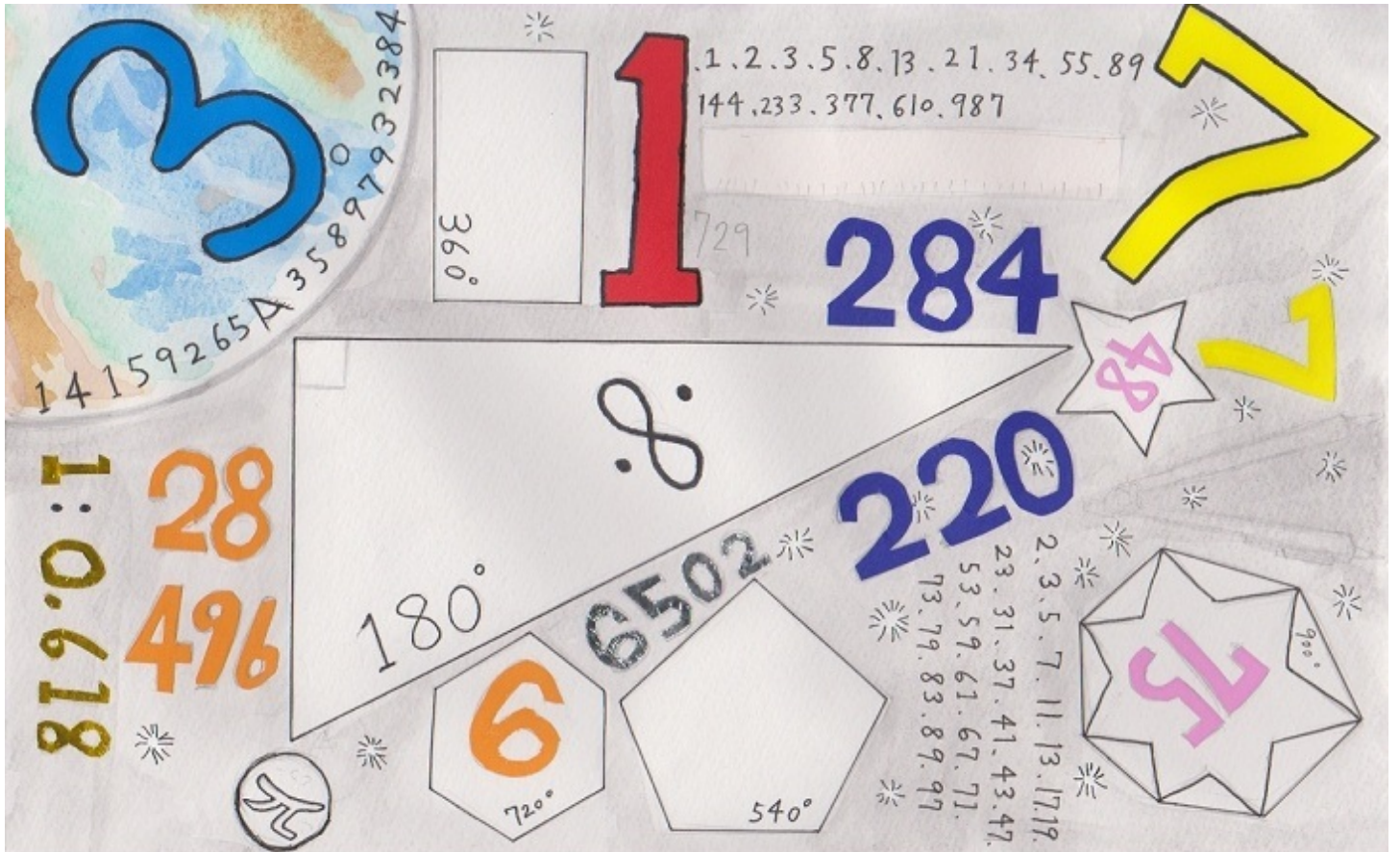
表にはカードにそれぞれ、「1」から「9」と「0」の青い数字があり、裏には図形や数字が描かれている柄がある。

「そのカードの柄は、カードの役が描かれているんだ。」

トシヒコはカードの柄をもう一度、よく見た。

多角形の中に、それぞれの角を足した和が描かれ、カードの下側には棒線の内側に「1」が描かれ、その横の縦の傍線の内側に「1.61803398...」と、黄金比の数字が描かれ、丸い円の中には円周率が描かれ、カードの上部には完全数の「28」があり、左側にはフィボナッチ数が、右側にはいくつもの素数があつた。

でも、三角形の図形は他と違って、瞳から出た視線が、ひとつの星を見つめる形になっている。星の先には、「7・7」と描かれている。



絵が下手なので文章の記述通りに作画できなかったよ

「その7と7は、七月七日、君の誕生日だよ」

トシヒコは、お父さんの「俊夫」の「俊」と、「彦星」の「彦」を取って、名づけられた。

三角形の頭上に輝く星は、「彦星」なのだ。

「そのカードは、君のカードだよ。誰のものでもない。君のものだ」

トシヒコは、やがて満面の笑みを浮かべた。そして、オジさんに抱きついた。

「ありがとう、オジさん」

「ハハハ。喜んでくれて、オジさんもうれしいよ。でもまだ、そのカードのことを話し終えていないんだ」

トシヒコはオジさんの体から離れた。

「そのカードの柄を描いたのは、僕なのさ。僕は絵描きさんになりたかったからね」

「オジさん、本当にありがとう」

「それじゃあ、さっそく、ゲームをしようじゃないか」

ゲームが始まると、トシヒコが優勢にゲームは進んでいく。役を2つも作って、3ラウンド目に入ろうとしたとき、オジさんは立ち上がった。

「アレ、オジさん、またトイレなの？ 大丈夫？」

「うん。どうも、朝からお腹の調子がよくないんだ」

そして、ついにトシヒコはオジさんにゲームに勝った。

9イニング、3ラウンド、1ゲームになってから、はじめての勝ちだった。

「今日は、このくらいにして、帰るよ」

「ごめんね、オジさん。お腹の具合が悪かったのに」

「いや、いいんだ。こう見えても、僕は食いしん坊だから」

そういつて、お腹に手を押さえて、オジさんは帰っていった。

オジさんの入院

トシヒコは病院に駆けつけた。

病室ではオジさんがベッドの上で、布団を被って頭だけを出していた。

「もう、杖なしで歩けるんだね。本当によかった」

「オジさん、ボクのことはいいから、オジさんこそ大丈夫なの？」

「心配をかけてごめんね。大丈夫さ。いやあ、前とは逆になってしまったね。君をこの病院でお見舞いしたのに、今度は僕が君にお見舞いを受けている」

「そんなことより、病気は大丈夫なの？」

「ただの急性腸炎さ。合併症もなにもない」

「本当に大丈夫なんだね？」

「ごめんね。大丈夫なんだよ。お医者さんがオオゲサに入院をすすめるから、さすがにお医者さんの言うことは聞かなくちゃいけないから、入院しただけなんだ」

「あのとき、どうして、具合が本当に悪いって、言ってくれなかったの？」

オジさんは、目をつぶった。目の端に、涙の玉がひとつ、ふたつできた。

「ごめんね。あのとき、僕はひどい下痢をして、血が混じっていたけども、君が僕に勝てるかもしれない可能性の芽を摘むことは、とてもできなかった。だから、ひとつ、演技をしたのさ。僕は映画俳優になりたかったからね。どうだい、うまく君をだませただろう。病気じゃなくて、ただお腹をこわしているとばかり思っていただろう」

トシヒコはもう、泣き出しそうだった。

「……大人になったら、誰でもひとつ、どんな子でも、小さな子でも、大きな子でも、男の子でも、女の子でも、たったひとつ教えられることがある。僕は君にたったひとつ、数のことを教えただけだよ。

何も気に病むことは無いよ。大人なら、どんな子にもすることだから...」

トシヒコはオジさんに抱きついて謝った。

オジさんはサッカーと一緒にすることが遅れてしまうことを謝った。

トシヒコはオジさんが大好きだから、病気がはやく治ってほしいと願った。

病院の中庭で、トシヒコとオジさんは仲良く歩いていた。

オジさんは元気そうだ。

「オジさん、前に言っていたね。7つもなりたいものがあるって」

「うん、そうだよ。」

「お医者さんに、音楽家に、天文学者に、プロ野球選手、絵描きさんに、映画俳優。でも、7つはまだ、ボクは聞いていない。当ててみようか」

「そうだね、当ててごらん」

「数学者！」

オジさんはにっこりと微笑んだ。

「ご名答」

「やっぱり、そうだ」

トシヒコはうれしくて、すっかり治った足で、オジさんの周りを駆け回った。

「オジさん！」

「なんだい？」

「ボクも数学者になる。それで、オジさんと一緒に、数の秘密のナゾを解き明かすんだ」

オジさんはこれには、少々驚いた。

「トシヒコ君は、サッカー選手になるんじゃないのかい？」

「サッカー選手で数学者さ」

大きくなったトシヒコが、サッカーボールを蹴って、手には分度器や定規やたくさんの図形の模型を持っている姿を想像して、オジさんはまた、微笑んだ。

「そうか、それなら、数のおさらいをしよう」

「うん」

「7は魔法の数字。3はバランスの数字。そして、1は選択の数字……」



わすれないよ
ラマヌジャン